

第1章

江戸時代 の奈良の災害

奈良県は日本最初の都が置かれた土地ということもあり、『日本書紀』に記された水害と地震についての最古の記録は、いずれも奈良で起こったものについて記述されています。以来1400有余年の間に、奈良県内で数え切れないほどの自然災害が発生したことが各種の史料に記録として残されています。この項では、それらの災害の中から、史料がある程度そろっていて、伝承として現在まで語り継がれている江戸時代に起こった奈良県の災害をご紹介します。

1-1 江戸時代の水害

『日本書紀』には推古天皇9年(601)5月のこととして、大雨で河川が宮廷にまで流れ込んできたことが記載されています。5月とは現在の暦では6月初旬から7月初旬に当たるので梅雨どきの大雨による洪水被害であったと推測されています。これが水害について記された最古の記録であり、その後、延長4年(926)年7月19日(新暦8月29日)には『日本紀略』に大和川の最初の水害について記されるなど、昔から奈良県では災害に悩まされ続けていたことが分かります。

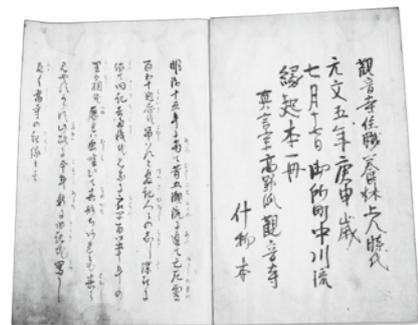
江戸時代に入っても、耕地開発や洪水対策などで治水事業が大規模化する反面、それを上回る自然の脅威により、洪水被害は減ることはありませんでした。奈良県でも、幾度かの災難に遭遇しましたが、中でも江戸中期に起こった「御所流れ」と、江戸後期の「初瀬流れ」は、現在までに多くの記録が残されその実状を知ることができます。

■ 御所流れ

元文5(1740)年閏7月17日(新暦9月7日)に、現在の御所市で集中豪雨により葛城川が決壊。激流で周辺一帯が一瞬にして泥海と化しました。『続日本王代一覽』によると、京都で大風雨による洪水被害があったことを伝える記事に続き、「和州葛城川洪水、五瀬村の民家多漂流す」と記されています。

葛城川は上流地帯の勾配がきつい上に川底が地面よりも高いところにあつたため、ひとたび大雨などで増水すれば、流域は洪水被害に見舞われることになりました。特に御所は平坦部への出口付近に当たっていたので、急勾配で流れてきた大量の河水が一気にあふれる地域になり、昔から大洪水の災厄を受けてきました。奈良測候所の初代所長である青木滋一氏はその著書『奈良県気象災害史』で、この洪水禍をもたらしたのは、台風の影響による大雨が原因であろうと推測しています。

この水禍は「御所流れ」として現在でも語り継がれています。御所市の観音院



『御所流』本文

には『御所流』という書物が残されていて、これはもともとあった災害当時の記録誌が虫食いなどで判読しにくくなってきたため、明治10（1877）年に災害死没者の回忌法要を行うのを記念して新たに書き直されたものです。

『御所流』によると、その年は正月から春のような陽気になったかと思うと1月中旬には寒さが厳しくなるなど天候が不順だったようで、4月に地震や風雨などの天変が2、3度ありました。土用の日（旧暦では6月ごろ）は綿入れを着なければ耐えられないほどの寒さになるなど、住民たちは珍事が起こり憂き目を見ることになるのではないかと薄氷を踏むような思いで日々を過ごしていたそうです。そんな中、前代未聞



御所流れ「堤切れの図」

の大雨に見舞われたということです。雨は閏7月17日（新暦9月7日）の午後2時から4時までの間に集中して降り、葛城川の堤防が決壊し、それを見越してつくられた請堤^{うけつつみ}までもが2か所で切れてしまいました。水は怒濤のごとく押し寄せて「西五所村ハ半分余流れ財宝を捨て逃げる者」（『御所流』より）は、さながら鶴に追われた魚のように我先にと逃げまどったということです。村は一带が川のようになり、なんとか家財を持ち出そうとして逃げ遅れおぼれてしまったり、親子が抱き合ったまま流されてしまったり、水に四方を囲まれ浮きつ沈みつしながら流されていく者がいたりなど、目を覆いたくなるようなありさまであったと記されています。また、水に流された人の中には家にしがみついて危うく難を逃れた人もいたようで、『御所流』を保存していた観音院には「逃げ遅れた住職がとっさに風呂おけの中に避難し、町の北の端まで流されたが助かった」という話が残されています。

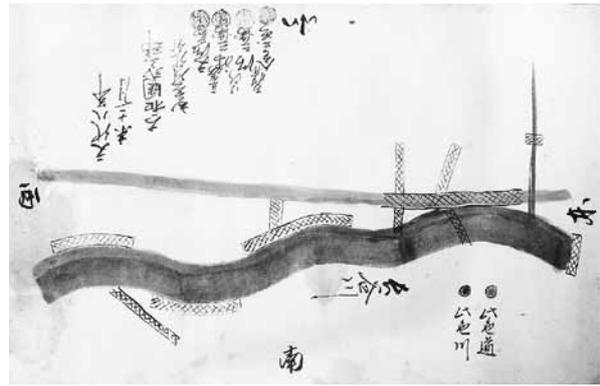
この洪水での被害者については、「流死人男女共五十六人」（『御所流』）と記されていますが、大正3（1914）年に八木測候所が発行した『大和風水害報文』では「千二百軒の所七百軒許流れ溺死者三百人程あり」としています。一説では具体的な数字として218名が命を失い、流失家屋601戸、倒壊家屋58戸、蔵の流失300軒で、残った家は41戸で蔵は18軒だけだったとも伝えられています。なお、御所市には六軒町という地名がありますが、これはほとんどが洪水に流されてたった6戸しか家が残らなかったことに由来するという説もあります。

■初瀬流れ

文化8（1811）年6月15日（新暦8月3日）に、現在の桜井市で初瀬川決壊により洪水が発生し「初瀬流れ」と称され現在も語り継がれている大災禍です。その様子は『大和風水害報文』の「文化八辛未年大和洪水初瀬流 紀元二四七一年 西暦一八一一年」に記述されていて、詳細はそれにより知ることができます。



江戸時代の出雲村（現桜井市出雲）の地図
 (写真提供：出雲区自主防災会)



出雲村堤防決壊絵図
 (写真提供：出雲区自主防災会)

「六月十五日夜五ツ時より小雨降出し同夜八ツ時頃より一時許大雨頻に降りし爲めに初瀬より奈良迄の山手は殊の外大水となり初瀬にて家三十軒流れ溺死せし者六七十人あり其他に泊込の旅客十五六人溺死せり而して追分、金屋、三輪の邊は床上へ浸水し布留谷にても人家五六軒流れ丹波市村は全部床上へ浸水せり又岩屋谷村にても家二軒流れ櫟ノ本村にては土橋悉く流る又菩提山川の出水にて高樋村に潰家二軒と中之庄村に流家二軒あり蔵ノ庄川破堤し人家三軒流れ白土村、發志院村、中條村、番條村等一躰に水押となる又岩井川は北側三ヶ所切れ大安寺村水押となり往来二日止る」
 (『大和風水害報文』より)

雨は夜五ツ時（午後8時ごろ）より降り出し、夜八ツ時（翌午前2時ごろ）には短時間に極めて多量の雨が降りました。時間降水量は100ミリ程度に達していたとも考えられています。奈良県以外には特に大きな被害も出ていないようなので局地的に大雨が降ったようです。多量の雨が一挙に降ったため初瀬川の上流で決壊。追分、金屋、三輪（現桜井市）から布留谷、丹波市村、岩屋谷村、櫟ノ本村（現天理市）、高樋村、中之庄村（現奈良市東部）にまで被害が出ました。被害の中心となった初瀬周辺では集落全体が荒川のようになり、死者は126名に及んだとの記録もあります。現在、桜井市の出雲地区には、上半身を地上に出し、腰から下が埋まっている地蔵石仏がまつられています。が、「初瀬流れ」で川上から流されてきたものが地域の人に助けられたと伝えられ、「出雲の流れ地蔵」と呼ばれています。

初瀬川流域ではこの「初瀬流れ」の約ひと月前の5月6日（新暦6月26日）にも、三輪で3戸が流失し、三輪そうめんに大きな被害を出した災害が発生していますが、この梅雨時の洪水を経た後だったこともあり、被害が大きくなったとも言えます。宇陀郡石田村（現宇陀市榛原石田）の『笹岡家文書』には、大雨とはいっても格別に降ったというわけではなく、その程度の雨は年のうち何度かは降るようなものなのに、出水があったのは不思議であると記載されています。同文書は続けて、石割峠（宇陀市）から春日山裏手まで小さな山崩れが数百か所で発生し、そのために出水があったのではないかと記しています。石割峠以南は特に被害はなかったようでした。

「初瀬流れ」と称されているため初瀬近辺だけに大きな被害が出たような印象を受けますが、堤防の決壊などで白土村、發志院村、中條村、番條村（現大和郡山形市）や大安寺村（現奈良市）にも被害が出ています。『大和風水害報文』では続けて、

「奈良山よりも多く出水し猿澤池の鯉^{たすう}多數流出せり、奈良町も水押^{ため}の為に番所及び牢屋へ浸水し囚人等は山へ避難せしむ奈良三條の西方にて水の深さ八尺許あり郡山大橋落合にて北方へ切れ京街道は五六尺の深さあり今回の出水は一夜の雨とて宮堂、吐田、窪田^{ごと}の如き水害場所には損害なく^{かえつ}反て山の峯にて流家あり死人ありしは實に珍事なり」
(『大和風水害報文』より)

とあり、奈良の中心部でも少なからず被害の出たことが伝えられています。また、佐保川と初瀬川が合流する地点にある、宮堂（現大和郡山市）や吐田（現磯城郡川西町）、窪田（現生駒郡安堵町）といった本来なら被害を受けていたであろう平野部が無事で、山間部の被害が大きかったことが不思議であるとしていますが、これは短時間に多量の雨が降ったため河川に注ぎきれずに上流でそのまま洪水となったためであろうと、『奈良県気象災害史』で青木滋一氏は推測しています。いずれにしても、その大小はあれ、県東部の山間地帯から奈良盆地にかけて、大きな被害が出たようです。

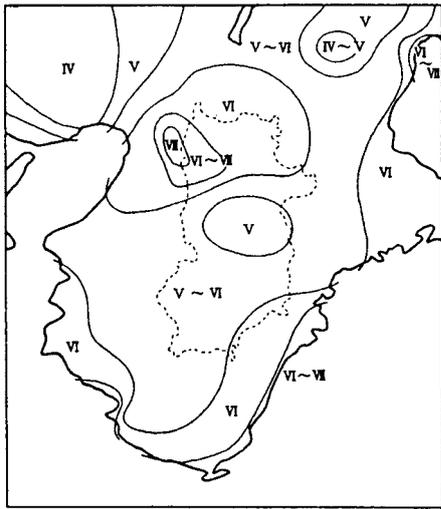
1-2 江戸時代の地震

『日本書紀』には、^{いんぎょう}允恭天皇5（416）年7月14日（新暦8月23日）の項に^{なるふる}地震の記述が見られ、それが地震についての最古の記録となります。続く推古天皇7（599）年には^{やかす}舎屋がことごとく破損するほどの震災が奈良で起こったことが記されるなど、地震による大きな被害が少ないといわれる奈良県でも、歴史をひもといてみれば幾度かの災厄に見舞われてきたことが分かります。それ以降も、天武13（684）年10月14日（新暦11月29日）に歴史に記録された最初の南海トラフ系の巨大地震が発生し、で天平6（734）年4月7日（新暦5月18日）には地震が起こった旨の記述が『続日本紀』にあり「圧死者多」と記述されています。畿内七道地震と呼ばれるこの地震については、津波などの記録がないことから内陸型のもものと見られていて、震源も奈良県内にあったのではないとも言われています。ほかにも南海トラフを震源とするものでは、仁和3（887）年7月30日（新暦8月26日）、永長元（1096）年11月24日（新暦12月17日）、康和元（1099）年1月24日（新暦2月22日）、天正16（1361）年6月24日（新暦8月3日）など、マグニチュード8クラスの巨大地震が発生し、治承元（1177）年10月27日（新暦11月26日）には震源が現在の奈良市にあったとされる大地震が起っています。

いずれも寺社の記録で伽藍や仏像が破損したなどの記録は残されていますが、人的被害については具体的な数値が記されているものは少なく、その被害規模は推測するしかありません。ある程度具体的な記録が残されるようになるのは、江戸時代以降になってからです。

■ 宝永地震

宝永4（1707）年10月4日（新暦10月28日）午後2時ごろに発生した地震で、マグニチュード8.4と推定され、2011年の東日本大震災のマグニチュード9.0に次ぐ、わが国では史上第2位の規模を持つ巨大なものです。震源は和歌山県潮岬沖



宝永地震（1707）における震度分布図
 （『奈良県の気象百年』より）

で、東海、東南海、南海地震が同時に発生した地震であったと考えられます。九州東南部から伊豆、房総半島まで太平洋沿岸の広い範囲が津波に襲われ死者は少なくとも5,000人余、倒壊・流失家屋約7万7,000戸にも及んだと見られています。

奈良県の記録としては『続史愚抄』に「大和また甚だしく、法華寺塔倒れ、永久寺内山諸堂大破す」とあり、推測される震度は、奈良・郡山・柳生で6、永久寺のある天理近辺では6～7程度あったのではとされています。大田南畝編の『竹橋余筆別集』には「亥十月四日地震ニ付破損之所々有増書附」として、全国代官所別被害が箇条書きに残されています。それによると3,219戸の潰家、3,595戸の破損家、63名の死者が出ていて、奈良県の地震被害記録として

は非常に大きいものとなっています。

東日本大震災を経て過去の地震研究に再び注目が集まり、最近の調査では大阪だけで死者数が2万人を超えていたのではないかと推定されています。今後、研究がさらに進めば新たな発見があるかもしれません。

■伊賀上野地震

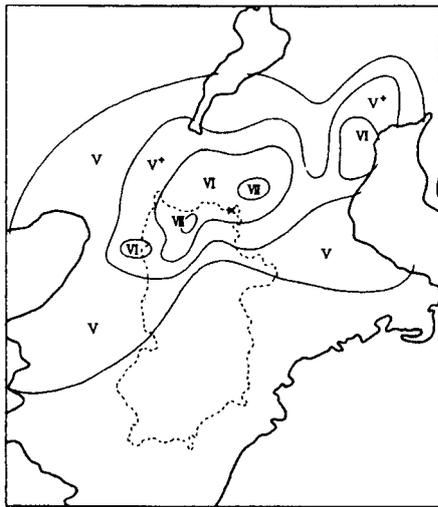
嘉永7（1854）年6月15日（新暦7月9日）午前2時ごろに発生した地震で、伊賀西北部、大和東北部、山城南東端、近江南部に大きな被害をもたらしました。マグニチュードは7.3で、震源は現在の三重県伊賀市近辺。木津川断層帯の活動による内陸型の地震と考えられています。本震の前の6月13日（新暦7月7日）から地震が群発し、全体の被害規模については、少なくとも1,000名近い死者が出たようです。伊賀上野や四日市ではこの地震での最大震度6または場所によっては7の強さで揺れ、多数の死傷者を出しました。



伊賀上野に残る法華経塔

地元の有志6名により建立された供養塔で、法華経8巻が納められている。碑文には、地震による死者が594名に及び、国君がこれを深く哀れんで被災者に金米の交付を行ったことや、死者追善のための供養を国内諸宗の寺院にて行うようにと指示したことなどが記されている。

次いで被害が大きかったのが奈良で、現在の奈良市や大和郡山市あたりの震度は6くらいだったと推測されています。人的な被害としては『南都六月廿日出書状写』に「死人公儀書上二百八十四人」と記載されていますが、郡山について火葬場の順番待ちに「式百余り有」と記すだけで具体的な数字は示されていません。現存する文書によっては、南都で「死人三百五十人」とか郡山で「南都同様死人凡百二三十人」、「圧死百五拾人余」などの数字を挙げているものもあり、そのような中には地震直後の文書も含まれていて、どれほどの信ぴょう性があるのかは今後の研究



伊賀上野地震（1854）における震度分布図
 （『奈良県の気象百年』より）



地震でゆがんだ柳生藩家老小山田家の石垣
 （『奈良市災害編年史』より）

が待たれるところです。しかし、そういった点を差し引いても、記録に残る奈良県の地震被害者数としては最大のものであり、ひとたび県内を含む周辺地域が震源となる内陸型の地震が発生すれば大きな被害が出る可能性のあることを示しています。

前掲の『南都六月廿日出書状写』には、ある家族の避難行動を通して地震発生前後の状況が克明に描かれています。それによると、最初に揺れたのは6月13日午之刻（7月7日昼12時前後）のことで「大震動」とあり、暮れ方までに3回地震があったようです。そして、「十四日昼八ツ時（午後2時ごろ）少々震、夜九ツ（午前0時ごろ）甚敷大震」とあり、その揺れに驚いて家族全員を連れて、猿沢池の衣掛柳ころもかけやなぎまで避難してきました。その後も2、3度揺れを感じていたところ雨が降り出してきて、慌てて逃げ、食料も持っていなかったため、彼らは仕方なく住家に戻ることになります。家で雨具や食べ物の用意をしていると、「十五日明がた殊外甚敷大震動有之、左右へ五六尺ばかり持上げ持下げ……」と建物が激しく揺れ、今度は逃げることもままならず一家で死を覚悟したということです。揺れが収まり幸い家屋の倒壊は免れたため命は助かりましたが、外に出てみると両隣の家は押し潰されていました。再び先ほど避難していた場所に戻りましたが、また雨具を持って出られず、雨に濡れながら耐えていたときにも何度か揺れ、五ツ時（朝8時）ごろには雨がやんで晴天となり、今度は炎暑に耐えているうちにも何度か地震があったということです。

この避難一家は日が暮れてきたので、興福寺南大門の前まで移動し、そこで竹の枝を集めて小屋を作ったということです。その時の状況は、「興福寺筋堀、寺中之土壁不残崩落、尤寺中之内にも、客殿、書院、押倒候処も有之、大地割れ、南円堂石垣、敷石等不残崩候而、元興寺塔五重目屋根ふり落申候、春日社石燈籠廿壺本残り跡不残倒申候」（『南都六月廿日出書状写』）。市中は家屋などの「凡七八百軒押しに打れ」という状態でした。

地震はその後も続き、16日は昼夜揺れ通して何百回かは数知れないほどで、17日は昼間に10回ほど揺れて午後4時ごろに大きめの地震があり、夜から朝にかけては9回ばかり。18日は10回ほどで夜にも2回、午前2時ごろに大きめの揺れがあったようです。19日昼には2、3度揺れ、書状ではこの後のことは追って報告すると記されています。

書状の文面からもかつて経験しなかった事態に遭遇していることが読み取れます。書状にはその時のうわさとして、春日山の裏手にある穂山という材木を切り出す山の周辺から、15日の夜に「大筒（大砲）を打ち放したような響き」を聞



奈良市古市町平尾池の普請の碑

いたという話を拾い出しています。春日山の裏手という震源の方角にもあたり、このうわさ話にはかなりの真実が込められているようにも思えます。その方向に位置する柳生では「大地割火炎吹出し誠に恐敷事」という状態で、奈良北東の山間地域も、大きな地震に襲われていたようです。

『南都六月廿日出書状写』は最後に、藤堂^{とうどう}氏領分にある古市（現奈良市古市町）での災害報告で締めくくっています。同所にあった奉行所が倒壊して役人の半数が死亡し、奉

行がけがを負ったほか、在所に300戸余あった民家がほとんど倒壊して15戸しか残っていないということを伝えています。しかし、古市では地震により池が決壊し大水が在所に押し寄せ、多くの家と人が流されたことが後になって分かりました。その被害規模は、死者67名とも75名以上とも、倒壊しなかった家屋が3戸しか残らなかったとも、400戸ほどあったが過半が潰れたとも伝えられています。『笹岡家文書』には「百姓家百廿壺軒潰れ死人百三十六人有」と具体的な数字が記されています。

現在の研究では、古市周辺では震度7に相当する揺れがあったと考えられ、県内でのこの地震における最大震度を記録した地域になっています。

伊賀上野地震では、非常に多くの文献や文書等が残されていて、今後さらに新たな発見がなされ研究が進む可能性もあります。以下では、現存する記録文書類の中から幾つかをご紹介します。

寄進者を記録した掲示板（山添村 春日神社蔵）

地震により大破した本殿を再建するため、寄進した氏子と、建造に携わった工事人の名前が記載されています。寄進の内容は金銭だけでなく建築のための木材もあったことが分かります。行末に「安政二年六月十日」の日付が付されており、地震より1年を経て修復が完了したようです。



表側



嘉永七甲寅年
六月十四日夜
大地震にて破却致し、
却致し不得止
事長衆役
人之働を以
氏子中を勸
誘致し助成
を以修覆為
成就者也

(提供：谷山正道天理大教授)

裏側

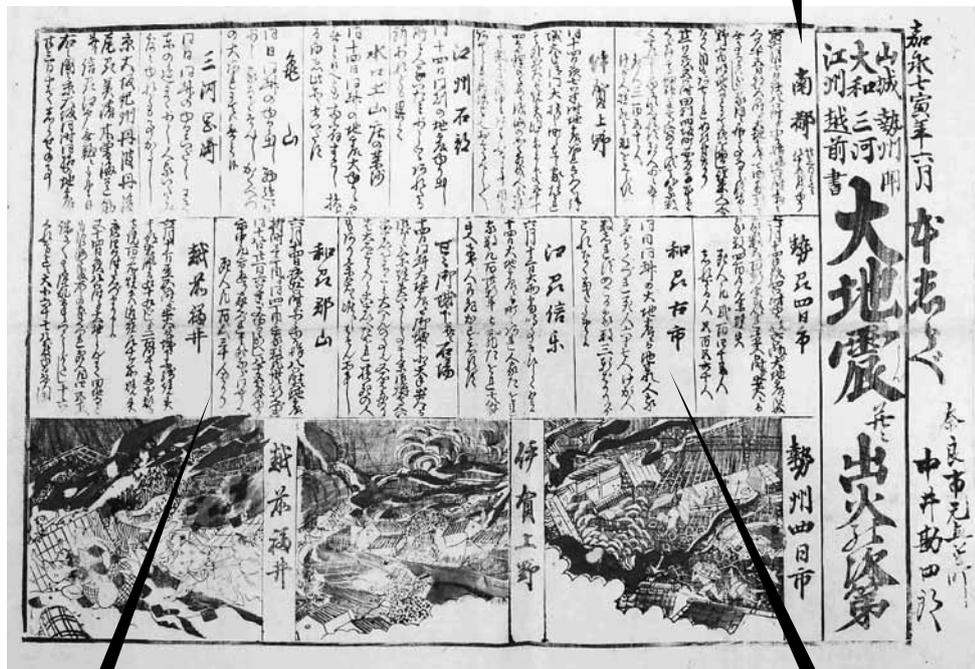
裏面には「嘉永七甲寅年(西暦1854年)六月十四日夜、大地震にて破却致し、止むを得ざる事、長衆・役人の働きを以て、氏子中を勸誘致し、助成を以て、修覆成就さす者也」と記されています。

『嘉永七年六月大地震瓦版』(元興寺町 個人蔵)

地震の発生を伝える瓦版では、「山城(現京都府南部)勢州(現三重県北西部から、愛知県西部と岐阜県南部の一部)大和(現奈良県)三河(現愛知県東部)江州(現滋賀県)越前(福井県)聞書 大地震ならびに出火の次第」との見出しがつけられ、広い範囲で被害が出ていることを伝えています。奈良県内では、南都(奈良市)、和州古市(奈良市古市町)、和州郡山(大和郡山市)の被害が伝えられています。

南都
寅六月十四日夜八ツ時(二時)
よりゆり始め明六ツ時(6時)
迄少々ふるい、
十五日朝五ツ時(8時)より
大地震にて町家一軒も
無事なるはなし、家内二居る
事ならず皆々
野宿明地などにて夜を明かし
往來人一人も
なく目もあてられぬ次第なり、
二十一日夜五ツ時(20時)ゆ
り油坂町四方寺本堂
くだけ高皇神主高へいのこら
ず其外家数
くすれたる家かすしれず死人
少々有之
死人三百五十人
けが人横死其数をしらす

(記録にみる幕末奈良の
大地震)より)



『嘉永七年六月大地震瓦版』(写真提供：奈良市教育委員会)

和州古市
同日同刻の大地震二
而池われ人家
多分くつれ死人六十七人けが人
数しれず、このる家数三軒ばか
りより
これなく義二御座候

(記録にみる幕末
奈良の大地震)より)

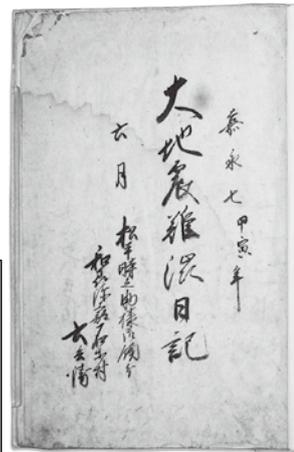
和州郡山
六月十四日夜九ツ時(午前0時)
よりゆり初め、八ツ時(午前2
時)大地震
柳町一丁目より同四丁目迄家数
凡三拾八軒崩れ、
同十八日、廿一日六ツ時半(午
前7時)に又ゆり返し八十五度
ゆり、
市中凡三分通り家崩れ、其他南
都同様
死人凡百三十人

(奈良県気象災害史)より)

『大地震難渋日記』

(奈良市指定文化財 月ヶ瀬石打自治会蔵)

旧添上郡石打村(現奈良市月ヶ瀬石打)の庄屋であった田北六兵衛による、地震発生当時のようすが記された日記で、昭和42年に郷土史家稲葉長輝氏により発見されました。「馬の腹ニあぶ喰付、腹のかわをうこかすごとく、なみよるていにゆりうこく」など当時の状況が克明に描かれています。この「大地震難渋日記」は稲葉氏により現代語訳され、図書館などで読むことができます。

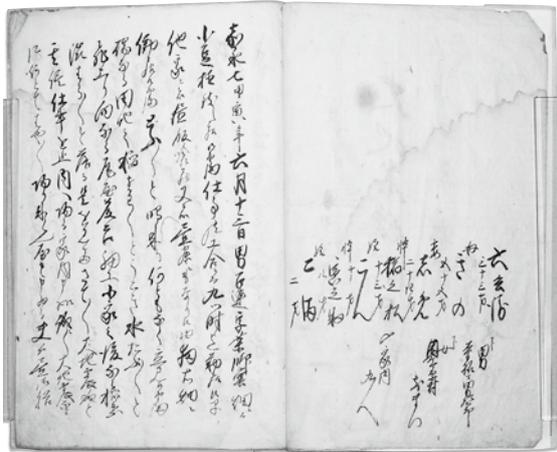


『大地震難渋日記』表紙

(写真提供：奈良市教育委員会)

嘉永七年甲寅年
大地震難渋日記
六月 松平時之助様御領分
和州添上郡石打村
六兵衛

(『記録にみる幕末
奈良の大地震』より)



『大地震難渋日記』

(写真提供：奈良市教育委員会)

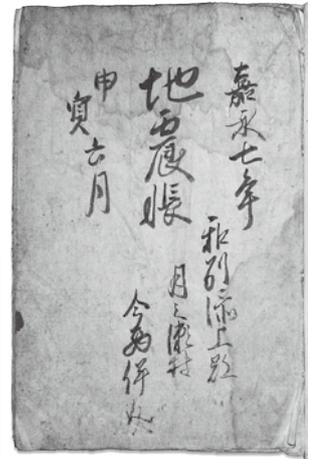
六兵衛 三十三才 倅 寅之助 八才
母 きの 五十五才 娘 こま 二才
妻 しめ 二十四才 下男 寺脇勇次郎
倅 猪之松 十三才 下女 奥ヶ原村おまつ
娘 こん 十才 下家内 九人

嘉永七年甲寅年六月十三日、男召連、字業師堂烟二而
小豆種敷し居候処、……どふくと鳴り来り、何ともなく
立見候処、端なる田地之稻さわくとうこぎ、水たぶくと飛上り、
向なり瓦屋藤吉、細工小家之後なる稲葉法はらくと落る、
是を見てさてくと大地震成と、其儘仕事を止、内へ帰る、家内申様、誠とくと大地震なるに、何とてはやくと帰り来らんと申ある……

(『記録にみる幕末
奈良の大地震』より)

『地震帳』(奈良市指定文化財 月ヶ瀬月瀬 個人蔵)

添上郡月瀬村の今西伊介という人物が書き残した手記で、「をうぢしん(大地震)」と記すのに「大」の字を7つも書き連ねて表現しているところに、地震がいかに激しいものであったかが物語られています。

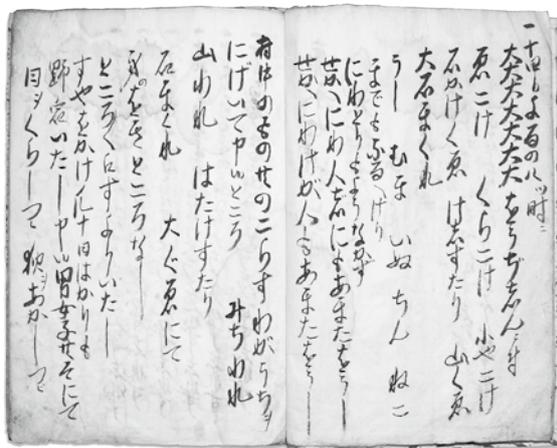


『地震帳』表紙

(写真提供：奈良市教育委員会)

嘉永七年
地震帳
申す 寅六月

(『記録にみる幕末
奈良の大地震』より)

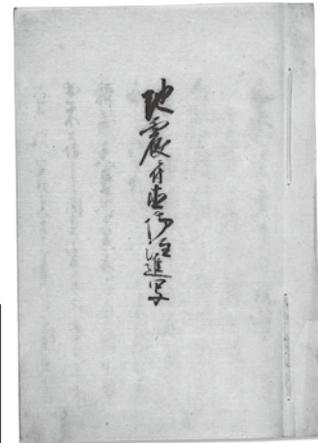


『地震帳』(写真提供：奈良市教育委員会)

(『記録にみる幕末
奈良の大地震』より)
一 十四日よるの八時二
大々大々大をうぢしん二付
系こけ くらこけ 小やこけ
石かけ系 けしすたり 山く系
大石まくれ
うしむま いぬ ちん ねこ
までもふるへけり
にわとりもよるなかず
せかへにわしにもあまたをうし
村中のも共のこらすわがうちヲ
にげて申候ところ みちわれ
山われ はたけすたり
石まくれ 大ぐ系にて
身のをきところなし
ところくと江すかりいたし
すやをかけ凡十日ばかりも
野宿いたし申候 男女子供そにて
日ヲくらしつ々夜アかしたつ々……

『地震に付直御注進写』（多門町 個人蔵）

奈良奉行所で同心を勤めた家系に残っていた記録で、地震直後の奈良の被害状況が記されています。奈良奉行戸田能登守から京都所司代脇坂淡路守に出された6月15日付（旧暦）のもの写しと、老中阿部伊勢守ほかに宛てられたものの写しが残されています。



『地震に付直御注進写』表紙
(写真提供：奈良市教育委員会)

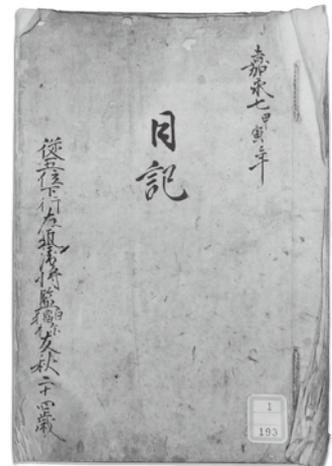
地震二付直御注進写
一 嘉永七甲寅年六月十五日之晚八時頃より大地震、引続震ひ不止、……六半時頃最初より八猶更強き大地震所々建もの人家類倒死人等多く……度々相震ひ稀成る天変也……
六月十五日 戸田能登守 脇 淡路守様

〔記録にみる幕末奈良の大地震〕より
大地震仕候儀二付申上置候書付
……取調候処 奈良市中之分
一 死人 六拾壹人／内男拾九人、女四拾貳人
一 倒社 貳ヶ所
一 倒寺院 拾壹ヶ所
一 倒人家 四百九拾九軒
六月二十八日 戸田能登守

〔記録にみる幕末奈良の大地震〕より

『東友秋日記』（春日野町 個人蔵）

春日大社の楽家（雅楽を伝承する家系）のひとつである東家の記録で、当時24歳の友秋により書かれました。家が全壊して持ち出せたのは楽譜と鍋釜だけであったと記し、二月堂が望めるやぶの中に建てた仮屋で、家族4人困窮した避難生活を送るさまが描かれています。



『東友秋日記』表紙
(写真提供：奈良市教育委員会)

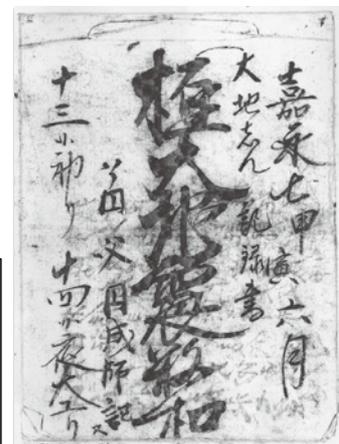
〔記録にみる幕末 奈良の大地震〕より
……大地震二付諸方者不及申ス予宅も不残こけ大破損二とうハクいたし候、先家内四人とも無別条候得共大ニ困窮仕候、無時大雨石之次第故拙者留主中故茨書物類鍋釜等取出候得共道具は不残家之下ニ相成候、……夫よりやぶ之中江かり屋ヲ立而雲天上ニ而家内四人共居ル尤夫より追々大震リ雨振たりやんだりも雲之中者先かよう之物ト存居候、尤右大震故地はびびわれ其より赤水吹出ス候、今日ハ十五日一日共震どうし何致ス事もあり様者先世上之じこくハ是と存候、食じもいたし兼大ニ困窮仕候、尤夜分やぶ之中ニ月堂ヲをがみ候而罷居候……

〔記録にみる幕末 奈良の大地震〕より

〔記録にみる幕末 奈良の大地震〕より
一 嘉永七甲寅年 日記
從五位下行左近衛將監 拍宿權友秋二十四歳

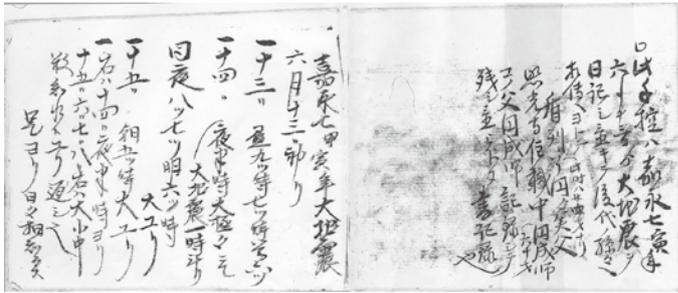
『極大地震数控』（山陵町 法林寺蔵）

南山城祝園村（現京都府相楽郡精華町）の照光寺住職円成が残した記録。大地震の記録を後の世代まで伝えよと父親が託したと、子である了円の付記が表紙の裏に記されています。



『極大地震数控』表紙
(写真提供：奈良市教育委員会)

〔記録にみる幕末 奈良の大地震〕より
一 嘉永七甲寅六月 大地震志念記録書
極大地震数控
了円父円成師記ス
十三日初リ 十四日夜大ユリ



『極大地震数控』表紙裏と本文 (写真提供：奈良市教育委員会)

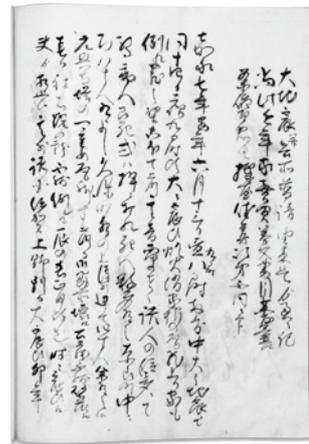
〔記録にみる幕末 奈良の大地震〕より

「此手控ハ嘉永七寅年六月十三日ヨリ大地震ヲ日記シ置キテ後代ノ孫々ヘ相伝ヘヨトテ盾列ア田○此時廿四才ナリノ実父照光寺住職中内成師○六十才ノ父田成師記録シテ残シ置極下々書記録也」

嘉永七甲寅年大地震
六月十三日初リ
一 十三日 昼九ツ時七ツ時暮六ツ
一 十四日 夜半時大極々ニテ大地震一時半リ
同夜八ツ七ツ明六ツ時大ユリ
一 十五日朝五ツ時大ユリ

『井上町町中年代記』(井上町蔵)

元興寺に近い井上町(現奈良市井上町)に残る町の記録が記された史料です。旧暦6月13日の正午ごろと午後2時ごろに2度、日付が変わった深夜にも再び大きく揺れ、灯火が消えて屋根瓦が飛び、家は倒れ壁が崩れ、その音は雷のようであったとし、多数の被害者があったことが記されています。



『井上町町中年代記』(写真提供：奈良市教育委員会)

嘉永七年寅年六月十三日昼九ツ時八ツ時二度中大之地震ニテ同十四日夜九ツ時頃大震ひ灯火消、家根の瓦飛上リ、家も倒れ蔵の壁こぼて崩、其音雷のごとく諸人の泣声ニテ驚、病人即死或ハ押二打れ死人多数有之、奈良町中二百八十人有よし、久保町、水の上、清水辺ニテ四十人余有之候、元興寺塔の一重め瓦残らず落る、御番所壊ル、土蔵不残壁落ル、春日社石灯籠不残倒し、辰の春正月頃迄、時々相震ひ候、夫より相止候、其外所国伊賀上野……

〔記録にみる幕末奈良の大地震〕より

■安政の大地震

嘉永7〈安政元〉(1854)年11月4、5日(新暦12月23、24日)の2日間にわたり発生した地震で、現在ではその前後で連発した地震も含めて、安政の大地震と呼ばれています。伊賀上野地震からわずか半年足らず後に再び大厄災に見舞われたことから、旧暦11月27日をもって「安政」と改元されました。

地震は2度にわたって起こり、1度目は11月4日(新暦12月23日)午前9～10時ごろ、駿河湾から遠州灘沖、熊野灘にかけての海底を震源域とする、マグニチュード8.4の巨大地震が発生しました。特に大きく揺れたのが伊豆西北端から駿河の海岸に沿って天竜川の河口に至るまでの範囲で、震度は三島や蒲原、江尻、相良、袋井などで7程度あったと推定されています。被害の大きかったのはそれらの地域ですが、甲府や松代(現長野市)、松本、諏訪、伊勢の津や松阪あたりでも倒壊家屋があったようです。また、地震の後房総半島沿岸から土佐湾にかけて津波が襲い被害が拡大。伊豆の下田では停泊中だったロシアの軍艦ディアナ号が7メートルに迫る大波をかぶって沈没し、流失した家々が900戸あったとされています。志摩半島や熊野灘沿岸では8メートルから10メートル近い津波に襲われた地域もあり、全体の被害規模は、死者が600名とも、2～3,000名あったとも言われ、倒壊および流失、焼失家屋は9,000戸近くとも3万戸あったとも言われています。

その約32時間後の11月5日(新暦12月24日)午後4～5時ごろ、今度は紀伊水道から四国沖の海底を震源域とする、マグニチュード8.4の巨大地震が発生し

ました。紀伊（和歌山県）南西部から阿波（徳島県）、土佐（高知県）、豊後（大分県）の沿岸部にかけて震度6程度の大きな揺れがあり、土佐南西部では震度6～7に相当する揺れがあったと思われます。地震による家屋倒壊に加えて各所で火の手が上がり、土佐で2,491戸が焼失したのをはじめ、阿波で約1,000戸、紀州田辺で355戸が全焼したと伝えられています。また、現在の島根県出雲市付近では局地的に大きく揺れて（推定震度6～7）、倒壊家屋が多数出たようです。地震による津波も発生し、房総半島の沿岸から九州東岸にかけて大波が押し寄せました。中でも紀伊半島南西部や土佐湾沿岸には10メートルを超える津波が到達した地域もあり、それらの地域や紀伊半島西岸では家屋流失や水死など甚大な被害が出たようです。被害規模の具体的な数値は不明ですが、数千人単位で死者が出たのは間違いないようです。家屋など建物への被害は強烈な揺れによる倒壊のほか、火災での焼失、津波での流失が重なったため数万件に上ったと見られています。

この2つの地震はその震源域の違いから、11月4日（新暦12月23日）のものを「安政東海地震」、11月5日（新暦12月24日）のものを「安政南海地震」と呼んで区別されています。

特筆すべきは安政南海地震では大坂（現大阪府）に津波が襲来し甚大な被害が出たことです。大坂では前日の安政東海地震でも震度5～6の強い揺れがあり多数の町人が避難生活を送っていたところに、再び震度6の地震に襲われました。そして、地震の約2時間後には、津波が襲来。その高さは1.6～1.9メートルとさほど大きなものではありませんでしたが、湾に停泊していた北前船などの大船を飲み込んだまま安治川や木津川を逆流していきました。折り悪く前日の地震で



安政地震絵図（写真提供：奈良県立図書館）



天理市岸田町の慰霊碑

行き場を失った町民たちが家財道具を積んで小船に避難していて、そのことごとくが流されてきた大船にはね飛ばされ被害が大きなものとなりました。津波だけで300名以上が犠牲になったようで、大坂だけで数千人単位での被害があったと言われています。

奈良県については津波被害がないため、比較的被害は少なかったと考えられています。安政東海地震では県全域で震度5も

しくは4～5、安政南海地震では郡山で震度5～6程度の揺れがありその他の地域でも相当に揺れたようです。被害が少なかったとはいっても、当然、大きな揺れにより家屋の倒壊などの被害は出ています。前出の『笹岡家文書』には、郡山で60戸ほどが倒壊し、丹波市（現天理市）、三輪、桜井ではそれぞれ5、6戸の家屋倒壊があり、桜井では死者も出たと記述されています。他に八木、今井、田原本でも家の破損などがあり、高田では30戸ほどが倒壊したようです。そして、「在町小屋掛かりいたし、寒夜に外住まい、誠に難渋致し申し候」（『笹岡家文書』）と、不自由な避難生活を強いられていた事実が残されています。

伊賀上野地震と安政の大地震という同じ年に起こった2つの地震は、人心にも経済にも大きな打撃を与えました。それに加え、欧米列強が日本に開国を迫り幕藩体制が終えんを迎えつつある時代の空気や、翌年には江戸で大地震が起こったり、コレラなど疫病の流行に追い打ちをかけられるなど、当時の民衆の間では何か天罰でも下されたかのように考える人もあったようです。

そのような時代背景を色濃く反映した慰霊碑が、現在でも天理市岸田町に残されています。中央に大きく刻まれた「南無阿弥陀仏」の文字の左右に、慰霊碑建立に至った願文が記されていますので、その大意を以下にご紹介します。

碑文の大意

嘉永7（1854）年6月14日の真夜中に大きな地震が起こり、翌日午前8時ごろにも大規模な余震があった。近畿地方やその北東の伊勢・伊賀地方などで被害が大きかった。

11月4日の午前10時ごろと翌5日の夕暮れどきに、またしても大地震があり、近畿地方で被災した区域は6月の地震と同程度であったが、摂津、伊勢、南海道諸国（紀伊および四国）、駿河、伊豆は大津波に襲われた。

翌安政2（1855）年10月2日の夜には関東地方で大地震が起こった。

およそ2年の間に3度もの天変地異が起こり、多くの建物が火災や倒壊で失われ、圧死やでき死などで命を落とした人民は何万人になるかも分からない。

さらに今年、安政5（1858）年の秋には西国から関東までの間で数か月にわたって疫病が大流行し、江戸以西の諸州で死者は1日に数万人を数えた。ああ、何と悲惨なことであろうか。

私はこのことを大いに嘆き、仏の力で彼らの魂を救おうと思う。以前、寄付を

募って岸田の上街道右側に地蔵菩薩の石像を造ったが、今回さらに「南無阿弥陀仏」の六字名号(みょうごう)を刻んだ石碑をそのそばに建てるものである。上街道を往来する男女は皆この碑に祈りを捧げてほしい。その功德によって、死者も生者もよい仏縁を得ることができるであろう。

安政5(1858)年冬

沙門信良 撰

横塘前部徳 書

(大意文提供：天理市教育委員会)

その一方で、津波で大きな被害を受けた大阪には、犠牲者を供養するとともに、地震で得た教訓を後世に伝える慰霊碑が残されています。碑文には、宝永地震では津波で多くの犠牲者が出たのにかかわらず、しっかり伝承しておかなかったために再び犠牲者を出してしまったことを悔やむ一文が刻まれています。そして、「大地震では津波が起きるものと考えておき、決して船に乗ってはいけない」や「火の用心こそ肝要」、「川に停泊させている船は流れの穏やかなところにつなぎかえ、使っていない船は高い場所に移動させて用心すべし」など、具体的な地震の心得が記されています。そして、碑文はその最後を「願くは、心あらん人、年々文字よみ安きやう墨を入給ふへし」と締めくくっています。その教えの通り、この石碑の文字には毎年墨が入れられ、津波で被害があった事実を風化させることなく現在へと伝えていきます。



大正橋（大阪市大正区）の東詰に残る
大地震両川口津波記念碑